

2016年6月1日

監査役会通信 (No.3)

社外監査役 松田修一

ESG 重視の経営を

IoT、AI、ロボット等が経済活動に浸透し始め第4次産業革命時代への突入といわれ、また世界の政治環境が不安定になり、世界の株式市場が再低迷したままになっています。このような不安定な市場の中で、規模的に成長し、株価も堅調に推移している企業群があります。

機関投資家の投資手法が、企業活動における ESG を重視した投資にシフトし、その対象となる企業群です。**ESG とは、環境 (Environment)、社会性 (Society)、企業統治 (Governance) の略です。**これに反した企業は、経済・社会から批判や撤退を突き付けられます。

「**環境**」については、地球温暖化による異常気象や海面水位、海洋・水質汚染等多くの問題を抱えており、未来の人類に負の遺産を残さないという長期課題と関係しています。発展途上国と先進国という南北問題を内包していると同時に、日本では自動車の排ガス規制やエンジン燃費の偽装問題をきっかけに、業界の統廃合も始まっています。

「**社会性**」とは、会社は社会の公器として経済的生存体を付与されているということを常に念頭に置き、営利団体であるのでただ儲ければよいという発想の対極の概念です。技術やモノづくり視点から市場や顧客視点で活動し、短期の利益追求よりも長期の持続的社会的貢献の視点を重視する考え方です。粉飾により企業活動の実態を取り繕い、経営陣の延命策を画策し、再建のタイミングを遅らせ、多くの利害関係者の将来を奪うのは、反社会的行為です。最近、従来の粉飾を不適切な会計処理と言い換えているのが気になります。会社の顔を粉で飾る見せ方の問題のレベルにしかすぎません。

「**企業統治**」については、2015年6月1日コーポレートガバナンス・コードについて基本原則が公表され、株主の権利・平等性の確保、株主以外のステークホルダーとの適切な協働、適切な情報開示と透明性の確保、取締役等の責務、株主との対話のルールが明確になりました。会社の持続的成長の基本ですが、環境変化の激しい中で、企業規模と業種特性に合わせた企業統治の体制をどう作りあげ、整備された体制を現実の経営活動において効果的に運用しているか、その運用が環境変化スピードを超えているかが重要になります。日本が「技術で勝って、ビジネスで負けた」といわれて久しいのは、事業を含む産業の急成長期に、スピードを加速する経営の体制を構築できなかったからでしょう。

プロ集団の FunPep の経営は、生き延びるよりも、勝ち残る体制を作り、「ビジネスモデル輸出国家日本」に貢献することであると、監査役の業務監査の視点から観ております。

以上